愛

Aブロック全作品と講評

作者さんや読み手さんの声は
http://www.columnland.net/
へどうぞ。

今日の家への帰り道

道路に愛が落ちていた
気づけばそれを拾ってた

それは小さなモノだった
それは大きなものだった

ためしにちょっと舐めてみた
まったく味はしなかった

つまらんモノだとまた捨てた
面倒なものだと投げ捨てた

今日の家への帰り道

道路に愛が落ちていた

愛す

いつからだろうか？キミに心を奪われたのは

ボクはもうキミの虜さ

食事の後はキミのもとへと足を急がせる

６０円、１００円、３４０円…

キミのためならどんな出費も厭わない

吸い込まれそうなほどきれいな白い肌

触れたら溶けてしまいそうなくらい純粋で

いや、キミはもうすでに溶けかかっている

そんな溶けているキミも素敵さ

ボクはキミを愛している

青は愛より出でて、哀より青し

いつもの帰り道、見上げた空は高く、青かった。雲ひとつ無い青空は、全てを包み込んでくれる深さを持っていることを、私は知っていた。

夏休みは、新入生の私たちにとって最初の大イベントだ。高校という新しい環境に慣れるために右往左往することも無くなり、勉強のしがらみからも開放される。そんなイベントを前にして、私は焦燥していた。原因はわかっている。私にはいま、好きな人がいた。

特にきっかけと言うべき出来事はなかった。初めは単に席が近かったというだけの間柄で、気さくな友人というような雰囲気であった。しかし、普段から交わされる会話の中に、当たり前に挿入される彼の笑顔に気付いてから、私は徐々に惹かれていった。不思議なもので、意識し始めるといままでのような軽い談笑すら出来なくなってしまった。相手も私が少し距離を置いているのを感じ取っているようで、最近は気まずい雰囲気も漂っていた。

しかし、もうすぐこの学期も終わる。夏休みという貴重な時間が訪れる。このもどかしい気持ちを抱えたまま過ごすには、長すぎる休暇だ。……そうして私は、決心をした。

「おはよう」

「……ん？　おはよう」

久しぶりに私から挨拶をしたからか、彼は驚いたような、でも嬉しそうな口調で応えた。いや、嬉しくあって欲しいと私が思い込んだだけなのかもしれない。

「もうすぐ夏休みだね」

「おぅ、授業との別れまでも数えるほどだな」

なんだ、簡単じゃないか。こんなにも簡単に会話が出来るのに、何故ためらいを感じていたのだろうか。

「どっか行く予定とかあるの？」

「あ～、特に予定は無いな。でもせっかくだし海は行きたいよな～。そうだ、休みの間一緒に海行こうぜ」

思わず、言葉に詰まった。他意はないのだろうが、私の意表を突くには充分であった。彼は黙っている私の気も知らず、茶化すように続けた。

「なんだよ、俺とじゃ不服か？」

おどけた調子で笑う。私は気を取り直して、本題に移った。

「今日の帰りさ、ちょっと付き合ってくれない？」

「帰り？　別にいいけど」

何事かと首をかしげる相手を余所に、私は席に着く。その後の会話や、授業は全く頭に入らなかった。

帰り道、約束通りに彼は私を待っていてくれた。向こうも、私から何か伝えられる事には気付いているだろう。私は立ち止まり、深呼吸を一回してから、切り出した。

「あのさ」

「ん？」

「聞いてほしい事があるの」

「なんだよ」

「……私と」

もう一度、深呼吸をして。

「私と付き合ってください！」

視線の先には、自分の足。するつもりなんてなかったのに、いつの間にか頭を垂れていた。どう思ったのだろう。予想外だっただろうか。私が好意を寄せていることには気付いていたのだろうか。そんな不毛な考えが次々に浮かんでは消え、永遠とも思える時間が流れた。そして、充分な時間を置いて、彼が口を開いた。

「……ごめんな」

言葉に合わせ、私は顔を上げる。

「そういう対象としては、見れないんだ」

いつもと違う、困ったような笑顔。

笑顔？

なんで笑顔でそんなことが言えるのだろうか。

「……そ、そっか、そうだよね。私たち、そんな雰囲気じゃなかったもんね」

私も、彼と同じような顔を作る。

なんで笑顔でこんなことが言えるのだろうか。

不思議と、涙は流れなかった。

私たちは自然と黙り込み、ただただ歩き続けた。私は呆けたまま、空を見上げた。最近まではこの時間になったら星が見えていたのに、今はまだ青い。その青空を眺めていると、私の青い季節が空に盗まれてしまったように思えて、無性に哀しくなってしまった。それでも、泣けない。隣に彼がいる限りは泣けなかった。

ポツッ

涙を堪える私の頬に、一筋の水が跡をつけた。

「……夕立か」

独り言のように彼がつぶやく。雨は徐々に勢いを増し、私たちは屋根の下に逃げるまでに体中を濡らしてしまった。私は、あんなに大きな青空でも涙を流すのを知った。

「ねぇ」

雨宿りをしながら、私は彼に問いかける。

「夏休み、絶対海に行こうね」

私の顔は、雨でびしょ濡れだった。

ランバラング星系の第三惑星ルトは天変地異に見舞われておりました。各地で地震が多発し、気温はどこまでも上昇し続けたのです。事態を重く見たルト星人の学者達は昼夜を分かたず議論を重ね、そして驚くべき結論に至りました。ルトは恋をしていたのです。

恋する惑星

ルトが恋をしている。そう聞いても信じる者はほとんどいませんでした。とはいえ、この天変地異に全く心当たりがないのも事実です。一般のルト星人達もひょっとしたらと思うようになってきました。

ところで、ルトの相手は誰でしょうか？その疑問はまもなく解決しました。ルトの公転軌道がずれ、ルトは少しずつ恒星ランバラングに近づいていったのでした。ランバラングとの衝突を恐れたルト星人達は必死にルトの説得を試みました。しかし、恋に夢中な惑星の答えは、「あいにこいっていわれたの」。結局、ルトはそのままランバラングと付かず離れずの距離まで接近してしまいました。

ランバラングに近づいたことで、ルトの環境は大きく変わるはずでした。それでもルト星人は持てる科学技術を総動員し、なんとか以前と変わらぬ環境を維持し続けたのです。それよりもルト星人達が気がかりだったのは、ルトとランバラングが文字通り「一緒になる」のではないかということです。その後何十年か経ち、またルトの公転軌道に変化が見られました。今度は次第にランバラングから離れていったのです。ルト曰く「近くでみたらイマイチだった」とのこと。学者達は一つの恋の終わりなのだと納得しました。安心したのも束の間、ルトはランバラングからどこまでも離れていきました。ルトに氷河期が訪れましたが、それでもルト星人たちは住み続けました。グレグリック星に近づいているのを知るのはまだ先のようですが、彼らは知ったとしても住み続けることでしょう。

結論・恋に振り回されるのはたまったもんじゃない

・愛は星を救う

愛のカレー

僕の彼女の名前は川澄良子っていうんだ。ごく普通の大学生。

「はいっ。あーん。ひろくんおいしい？……うれしい！」

僕はドラマとか見るのが好きなんだけどね。彼女は全然みたいです。彼女の家のテレビも壊れてて、なぜか夜ドラマの時間帯は映らないんだって。

「ドラマの話はしないでよ。あのシーンに似てるってどのドラマ？」

彼女はいわゆるコレクターなんだ。何を集めてるのかって？それがさ、ペットボトルの口の部分とか、使い捨ての割りばしとか……。僕のよく飲むコーヒーのが多いんだけど、どんなのでもいいわけじゃないらしい。何なのかな？

「そういえば、ちゃんと飲んだ缶とかとっといてくれた？ひろくんが集めてくれるのが頼りなのよ。この前みたいにゴミに出しちゃだめだよ。」

出しちゃってたんだ、気付かなかったよ。気をつけないと。

あ、そうだ。彼女は写真も大量に撮ってるみたいなんだ。それは全然見せてくれないんだけどね。照れてるのかな？フフフッ。かわいいやつ。

「今日は実験失敗残念だったね。綾子さんと二人ペアでやってるやつ。」

そうなんだよな…。やっぱりこんな時はおいしいご飯に限る！彼女は僕と付き合ってから料理も勉強してくれたんだ。おかげで今日もおいしい晩御飯。

「最近ひろくん貧血でしょ？わたしの料理たくさん食べて治してね！」

それを聞くだけで元気百倍でぇっす！やっぱり彼女のカレーはおいしいよ。やはりこのカレー彼女の愛の集大成なんだな。うん。最初のころは結よく指を切っててね。今ではうまくなって…って指の傷は全然減らないな（笑）

料理はうまくなっているはずなのにどうして指の傷はなくならないんだい？

「ああ、これ？　これはね・・・。

「か・く・し・あ・じ♡♡♡」

僕は今日も幸せものだ。

明日は

その夜、私が寝室で眠れないでいると開いた窓際に「あいつ」が現れた。どこか人を食ったような黄色い目を持ち、意地悪そうな斜めにチョンと跳ねたヒゲの黒猫。会うのは二度目で五年ぶり。私はプイと寝返りを打って寝たふりをする。

「おいおい、久しぶりなのに連れねぇなァ。せっかくだからちょいとお喋りでもして、賢い俺様とお馬鹿なお前で無意味な時間を過ごそうぜ。」

…こいつは猫のくせに喋る。しかも傲岸不遜で性格も口も最悪。

「そりゃ、俺は悪魔だからな。」

とは本人の弁。確かに最初会った時はびびったけど、どこまで信用していいものやら。

「で？なにか偉大な大悪魔の俺様に聞きたい事は？無いわけないよな。お代はお前の冷蔵庫の中のマグロの刺身とツナ缶とサーモンと牛乳ね。早く持ってこいよ。俺様ハラヘリー。」

シッポをぱたぱたさせる。こいつはかなりしつこい。諦めて言われたものを持ってくる。っていうか何で私の冷蔵庫の中身を知っているのだろう。

「そりゃ俺はあく」

うるさい、と一喝して私の最高の贅沢を差し出す。ああ、高かったのに。嬉しそうにがっつく悪魔（自称）猫。お代は払った。私はサーモンとツナをかじる猫に目で促されて一つ、質問する。

「人間と人間の間に本当に愛ってある？」

飲んでいた牛乳を噴き出して爆笑する黒猫。こいつはなんか動作がいちいち人間臭い。

「くくくく、女にとって愛は大切か、そうか。くだらねぇ。今まで聞いた質問の中で一番レベルの低い質問だナ。」

恥ずかしいのは百も承知。でも今日と明日の私にとって、それはとても大切なことなのだ。

「まぁ、いいさ。お代は頂いた。いろいろと恥ずかしくチョメチョメな事を語ってやろう。かっとばすからその寝癖がマリリンモンロー級な、虫が湧いた脳ミソでついてこいやぁ。」

どうでもいいが例えが間違ってる。マリリンモンローはとても美人だ。

「ふん。俺様は嫌いだからな。あいつを美人と認めねぇ。…まず、多くの馬鹿が勘違いしているのは人間が進化したと思っている事だ。赤子だけ残してあとは全員ぶっ殺してその赤子が成長したらどうなると思う？そこらの動物園でウホウホ言っているゴリラと同じになるだろうよ。発達したのは文明だけで哀しいことに中の人間が進化したわけじゃねぇ。」

黒猫はマグロの刺身を食べ始めた。こいつ好きなものは最後まで取っとく派だな。

「つまり、遊戯の本質が古代から全く変わってないように、人間の行動原理も変わっちゃいねぇ。基本的に腹が減れば喰うし、眠りたくなれば寝て、あと最後の一つは言わずもがなだろ？」

はい、とても。…しかし、うまいからってそんなにチビチビ喰うことなかろうに。貧乏性。

「うるせぇ。ぶっちゃけ人間はハーレムでも浮気でも二股でも八つ股でもなんでもできるんだ。愛する人はただ一人ってのはまぁ、慣れと倫理の問題だな。そこに愛を持ち込むのは馬鹿げていると思わないか？」

私は黙りこくる。皿から牛乳を飲むペチャペチャという音だけが静かに響く。

「人間が人間を好きになる。でもそこに絶対的な理由なんてありはしない。あるのは結果だけだ。お前が好きになった人間とその辺の好きにならなかった人間、どんな違いがある？性格？顔？金？似たようなやつなんて探せば多分いくらでもいるぜ？俺から見ればお前達は共に過ごした時間が作ったただの偶然と錯覚にすぎねぇよ。」

黒猫は溜息をついた。

「だが、それは当人同士では違うのかもしれねぇ。ただの偶然を運命だと思う方が幸せかもな。愛と運命と神は人間が発明した最も偉大なものだと思うぜ？実際はもっと世界は冷酷で単純だがな。」

それから私達はいろいろな話をした。哲学的な話からくだらない話、最近見た映画の感想。

そして、皿を最後まで舐め終えて黒猫は、じゃぁな、と身軽に窓から去っていった。いつもあいつは好きなだけ語っていく。

でも、私は感謝している。

前に初めて会ったときは、告白する勇気がなかった私をさんざん罵倒してくれた。きっとあれは黒猫なりの励ましだったのだろう。そして今日も。明日がだんだん嫌になっていた私だけれど、気が楽になった。あるのはただの偶然。私と彼が生きているのもただの偶然。彼と出会ったのも偶然。明日も偶然。なんとなく幸せでいいんじゃないか。絶対の愛なんて存在しないし、もしあったとしても、重くてわずらわしいだけ。

そう、明日は私の結婚式。

愛についての雑念

命題

「愛の量の大小は比較することができる」

証明　まずよく目にする光景、女の子が彼氏に「私のことどれくらい愛してる?」と聞く。それに対し男は空中に円を描きその大きさで愛の量を表現する。単位面積当たりの愛の量が一定である（愛の流量は濃度勾配に従い、平衡に達しているから）ことから愛の大小関係は円の面積の大小関係と等しいことがわかる。すなわち愛の量は大小比較可能である。さらにその量は面積に比例する。QED

愛の量について言えること

よくある小学生の三角関係について考えてみる。

A（♂）とB（♂）はC（♀）を愛している。

A曰「おれはBの3倍Cを愛してる」

B曰「僕はAの5倍Cを愛してる」

以上の条件でA，Bのそれぞれの愛の量を求める。

命題により二人の愛の量を文字でおき大小比較することができる。

AのCに対する愛の量をaなどとする。

すると二人の会話から次式が成り立つ。

$a = 3b$

$b = 5a$

この連立一次方程式を解くと

$a = 0$

$b = 0$

となる。

これはA，BがCを全く愛していないことを表している。

Kiss

付き合って5年。そろそろ君は僕のキスを許してくれるのかな。と言うより、何でそれを今まで拒んできたのだろう。小5の冬から僕は君の唇にいつ触れられるのかと考えていたけれど、結局は何もできないまま今日に至ってしまった。そして明日からはもう君は遥か遠いところへ行ってしまって、2度と会えなくなってしまうだろう。どうして君はいつも内緒にしたがるの。僕を悲しませたくない気持ちはわかるけど、「行かないで！」なんて勇敢な言葉を言えるほど、僕は君を深く愛することはできなかった。行動にうつるのが早すぎると、かえって君が離れて行ってしまうに違いないと思ったから。もっと早い時期に口づけを交わしておくべきだったのか。それをする以前に、体が壊れるくらいに強く、無言で、抱きしめてあげるべきだったのか。何一つ付き合った想い出もないまま、僕のはかない恋物語は裏表紙へと近づいていった。こんなに君が好きなのにどうにもできない自分そのものに嫌気がさしていた。

今日の授業が終わった。もう制服を着ている君を見ることができなくなる。友達が帰ってゆく中、僕は君のもとへと向かった。しかし周りの目が少々気になってしまったのか、愛想よく話しかけてあげられなかった。周りを気にしつつ、「後でここに来て」と赤い顔で君に言うと、君は僕を堕としたあの可愛すぎてどうしようもない笑顔で「うん」と答えていった。恥ずかしくてどうしようもなかった。でもなぜ恥ずかしがる必要があろう。付き合い始めて5年が経っているから、僕らは有名なカップルだった。手を取ってどこにでも連れていくことだって堂々とできたはずなのに忘れていた。君が僕にそれを望んでいたことを。堂々としていたのに隠れた付き合いで、僕の馬鹿さに君もうんざりしていたのかな。とか思っていると、「待たせてごめんね」と言っているかのように君が戻ってきた。君はまず「ごめんね」と言っていたよね。君はいつも僕を気遣ってくれるのに、僕は君にはおそらく何もしてあげられなかった。ならば今しか君に恩返しはできない。僕にできるのはこれまで君にしてあげられなかったキス、ただこれだけしか選択肢はない。いろいろ言いたかったけど、付き合った証がないのに別れようなんて許せなかった。僕の想いは単純だけど、唇で伝えたかった。

君をそっとかつ強く抱きしめた。叶うならばこのまま君を奪い去りたかったけど、しばらくの間はただこうしていた。そして柔らかな唇を感じるとともに、溢れそうだった君への想いが、それを経由して君に届くのを感じることができた。結局何も話さずに、君は別れ際にキスを返して帰って行った。教室は赤く光る夕日に染められていた。ちゃんと届いてくれているよね。文頭に現れたこの恥ずかしがり屋の言葉たちは。

Love and Life

太古の昔、世界に愛は存在しなかった。
地球上には原核生物や古細菌に代表される単細胞生物で溢れていた。
彼らは自己増殖によってまったく同じ個体を生み続けた。
彼らにとって死という概念は用をなさない。
一つの細胞が死んでもまったく同じ個体が増殖によって次々と増え続けているから。
しかし生命はこんな下等な段階で満足しなかった。
細胞同士が集合し、生きるための役割を分担することで高度で複雑なネットワークを形成し、進化を続けた。
そしてある日、彼らは素敵な方法を編み出した。
有性生殖だ。
有性生殖は、多種間での遺伝子交換を、そして個の発生を可能にした。
生命はより優秀な遺伝子を求めて、より良い相手に魅かれた。
そしてここに愛が生まれた。
だから、愛は時に打算的で時に冷酷だった。
そしてだからこそ愛は生命の瑞々しさに溢れていた。
しかし、ここには大きな落とし穴があった。
個の発生は同時に死の概念の誕生を意味した。
愛ある有性生殖を続ける限り、完全な個を複製することはできないからだ。
死の重みは全ての生命に等しくのしかかった。

愛の代償は死だった。
生物は永遠の生を愛に捧げた。
だから、愛には「永遠」に等しい価値がある。

もし死から逆説的に意味ある生を導きだすなら、こう言ってもいい。
僕たち生命は愛のために生き、愛のために死ぬ、と。

差し出した指の隙間から砂が零れていく
託した想いも何もかも 僕には遺らない

幾度も引いては寄せる白波 出会いと別れを繰り返す
いずれ来る運命を知っていながら
何故平気な顔をしていられるのだろう

差し出した傘の裂目から雨が零れてくる
其処にいた筈の人はもう 僕の傍にいない

幾度も忘れては甦る記憶 後悔と祝福を繰り返す
いずれ来る未来を知っていながら
何故平気な顔をしていられたのだろう

愛すること以外 何もできなかった僕は
気づいた時には 何もかも失くしていた

強く閉じた瞼の隙間から涙が零れ落ちる
一緒にいたいと強く願うほど
何故君は離れて行ってしまったのだろう

掌から零れて消えた君の面影

研究者と愛と

標高が高く空気と水が綺麗なレーベン地方。そこに、ホーホ・エーベネ研究所はあった。リーベはここに勤めて二十年の四十五歳、エーデル・シュタインという名の細菌一筋で研究を行ってきた。

エーデルは白くてもやもやしている、脱脂綿を濡らしたような菌である。人間が少しひんやりと感じるくらいの気温を好むため、普段は七つのシャーレに分けて入れられ、天然の洞窟に保管されている。リーベは毎朝この洞窟に立ち寄ってはシャーレを一つ取り出して散歩に出かけた。エーデルは日の光にあたると虹色に輝く。リーベがシャーレを黄緑色のみずみずしい草むらの中におけば、キラキラと輝きながら黄緑になってゆく。色が変わるだけでない。ふわふわしていたエーデルは小川の水のような透明な液体になる。その液体は、どんな病にでも効く魔法の薬となるか、劇薬となるかのどちらかだというが、作用が強すぎて、うかつに試すことはできない。毎日異なる変化の様子を観察、記録し、エーデルの生体解明に精を出すのがリーベの仕事であった。そう、リーベの仕事に終わりがあるとは思えなかった。しかし、リーベは気長にエーデルと向き合った。

共に散歩をするようになって五年目には、七つのシャーレそれぞれの特徴を捉え、識別できるまでになっていた。そして、変化の様子の違いは日射量に関係があることをつかんだ。十年経つと、リーベが心地よいと感じる陽気のときほど液体の輝きは増すということもわっかた。リーベは、エーデルが好む気候を自分も感じることができるようになったと心を躍らせた。研究者として共に十年歩んできたリーベにとって、エーデルは愛着のある存在となっていた。

そして、二十年目の春。レーベン地方は嵐にみまわれ、外に出られない日が続いた。ようやく天候が回復した日、リーベは七つのシャーレを一度に取り出して散歩に出かけた。久しぶりの太陽は輝いていた。リーベは、この数日間考えた魔法の薬の得方で頭がいっぱいになっていた。シャーレを草の上に置いてから、ちょうど十分後にシャーレを反時計回りに反回転させて…。しかし、エーデルは、白いままだった。いくら待っても輝かない。

リーベは気づいた。エーデル・シュタインは、高原の快適な気候を喜んでいたのではない、心地よい陽気に心が晴れていた自分に反応して輝いていたのだと。利用することしか考えられない人間には、その美しい姿は見せてくれないのだと。

置手紙で告白

愛の定義だとか
愛と恋の違いだとか
愛は永遠なのかとか
そんなことは知ったこっちゃないけど
今僕は君を愛している　ということは
信じて欲しい

…という訳で
僕が浮気したのは一時の気の迷いのせいなので
許してください　お願いします
愛してるのは君だけです　　いや本当に
追伸　今日は早く帰ります

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	今日の家への帰り道	0 pt	10 位	0 sp
		歌詞の一部、一番と二番の冒頭だけを提示してみました、といったような趣でした。 そのことで、読者がそれぞれなりの「続き」をふっと構想してみたくなります。 そんな先へといざなう微笑みも魅惑的な、まさに表紙好適品。		
A02	愛す	5 pt	6 位	2 sp
		さらりと季節感に乗せて。 おいしいよね。この季節だからこそのうれしさ。 あまりごてごて書き込まなかったのも、題材によくお似合いでした。 特別賞：冷たいで賞　/　冷え賞（誰がうまいことを言えと）		
A03	青は愛より出でて、哀より青し	9 pt	5 位	1 sp
		このだめだめ男めっ!! と思いつつ、そう、人の気持ちなんて、ままならないものだよね、と納得。 女性側の心情描写がほんとに自然で、安心して浸れました。まったくもって、この作者さんの「女性度」は驚くべし。どんな奇跡か。 青空が涙を流すラストがせつないです。 特別賞：しゃれてるで賞（タイトル・文章ともにきれい） イチオシフレーズ：「青は愛より出でて、哀より青し」×２ 「俺とじゃ不服か」		
		1 pt	9 位	0 sp

A04	恋する惑星	0 pt	10 位	4 sp
		ふぁんたじっく！ 宇宙空間の広がりの中での恋。ルトのセリフのチープさと、にもかかわらず、そんな乙女の気まぐれが星の運命をも左右してしまうトンデモ設定にはまりました。 牽牛織女なんてメじゃない奔放ぶりが、ほんと楽しくって、ラストの警句もシニカルでここちよいです。 イチオシフレーズ：「近くで見たらイマイチ」		
A05	愛のカレー	18 pt	2 位	0 sp
		しあわせなひろくんに、とんでもない結末が迫っていそうで心配な展開です。でもまあ、本人がしあわせならＯＫか。 ヤンデレかあ、そっかあ（めもめも）。 ポイントは入らなかったけれど、特別賞がこんなにたくさん。さらにイチオシフレーズ大賞ゲットです。おしあわせに☆ 特別賞：ごちそうさまで賞（インパクトにやられた。こういう愛の形もある）/　実話で賞（君の勇気に乾杯！）　/　あなたの想像力に感動してます賞（妄想が伝わってくる）/　フレンチポップ賞（ノリがポップだから） イチオシフレーズ：「かくしあじ（はあと）」×４　「はあと×３」		
A06	明日は			
		ただの偶然から運命を「発明」したのが人間の偉大ささ――本質をずばり衝いてくる黒猫さんにぞっこんです、このやろう。 そして明日は結婚式――ラスト１行で、しあわせオーラが燦然と放たれます。素晴らしいエンディングでした。おめでとう銀メダル!! イチオシフレーズ：「寝癖がマリリンモンロー級」「俺様ハラヘリー。」		

A07	愛についての雑念	19 pt	1 位	0 sp
		来ましたね。 引っ張って引っ張って、ああゼロかあ、というラストの解の爽快さがたまりません。 なるほどなるほど、方程式ってこういうふうに役に立つのですね。 おめでとう金メダル!!! イチオシフレーズ：「QED」「よくある小学生の三角関係」		
A08	Kiss	15 pt	4 位	1 sp
		貫きましたね、おのれの道。 二段組とは凝りまくり。完成度も高くって、ブラボー。 特別賞：Kiss賞（長いのをがんばった）		
A09	Love and Life	16 pt	3 位	2 sp
		生物の進化から語り起こした愛の価値。 きっちり論理性を貫いて、愛と死との意味という大命題へと挑んだ剛腕に拍手。 そのスタンスが評価されての価値あるブロンズ・メダルでした。おめでとう!! 特別賞：正統派でしょう（キレイな話だったから）/　愛は永久（Ａ９）で賞（愛することに理由などない。） イチオシフレーズ：「僕たち生命は愛のために生き、愛のために死ぬ」		
A10	無題（差し出した指の隙間から）	3 pt	7 位	0 sp
		零れてゆく。砂が、雨が、涙が、そして君の面影が。 夏の終わりの浜辺のさびしさを思いつつ読みました。まぶしい季節はもう戻らない。さようなら夏。		
A11	研究者と愛と	0 pt	10 位	0 sp

		シャーレの中にたたえられていたのは、じつは我が心。 　愛は与えることで、はじめて輝く。 　高原の爽やかさのなかで、寓話としてメッセージ性ゆたかに伝えていただきました。
A12	置手紙で告白	3 pt　7 位　5 sp 　ラストは軽〜く。 　チキンな恐妻家さんの、ほほえましい一幕。 　見せ方の巧さもあって、ウケましたね〜。最多特別賞です。おめでとう！ 特別賞：またヤルで賞（だって男だもの。）/　けっぱくで賞（ギャップがよい！）/　必死で賞（超びびってるから）/　妻は大事にしましょう（言葉じゃ伝わらないものがあるよね！）/　ギャップ賞（フォントと内容のギャップがおかしい←ほめてます） イチオシフレーズ：「今日は早く帰ります」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数　順位　特別賞 まじょコメント
B01	それは世界の、	9 pt　3 位　0 sp 　陽光のきらめきのなか、幼な子のまわらぬ舌で投げかけられる「愛」。 　それは無邪気であるがゆえに、軽く流せない。 　崇高な、けれどおだやかにつつみこむアトモスフェア。 　ふわりとイメージ喚起力ゆたかに届けていただきました。 　定位置（？）のラストから表紙へ進出して、おめでとう、ブロンズ・メダル!! イチオシフレーズ：「それは、愛？」
		5 pt　7 位　0 sp

B02	私の日記	ふるさと。束縛でもあり、たいせつな根っこでもあり。 いったん疎遠になって、また戻ってゆくプロセスのなだらかな起伏が、読者にもここちよい。 「妹の名前」のくだりとか、うまいなあ！ 乾杯という響きのきれいさが評価されてイチオシフレーズ大賞受賞です。 イチオシフレーズ：「つけぱなしのテレビに乾杯」「一人で暮らしを始めて１日目」「愛をこめて乾杯」「乾杯」（B2の人に恋をしました）		
B03	笑顔の素敵なあなたへ	6 pt	5 位	3 sp
		そうですか、めざましテレビですか。とっても早起きなんですね、作者さんは。 ゆったりした語り口と、はんなりフォントで、さらりとダマしていただきました。 特別賞：字がうまいで賞（フォントがイイ）　/　愛子の合言葉で賞（一途で……ステキ）　/　ファンレターで賞 イチオシフレーズ：「笑顔の素敵な皆藤愛子ちゃんへ」		
B04	誓い	3 pt	9 位	0 sp
		やっぱり夏だもの甲子園。そこに悲恋ドラマがプラスされれば、もう最強。 マウンドで振りかぶるくだりの力強さに拍手です。熱いなあ。		
B05	無題（手元に届いたダンボール）	2 pt	10 位	0 sp
		心づくしの品の数々。リズムよくぱっぱっと見せて、読者にもふるさとのぬくもりをお裾分け。 もうすぐ夏休みですね。 イチオシフレーズ：「もうすぐ、ふるさとへ帰ります」		
B06	愛の行為。	0 pt	12 位	2 sp

		わははは。うまいうまい。キワどいフレーズを塗り重ね、邪念へとみごとにミスリードして、その妄想をぷっつり断ち切り。技巧派でした。 特別賞：よく考えた賞（きわどい）　/　はさみを大切にね!!（ためになったから!!） イチオシフレーズ：「互いにすれ違いながらも、１つになることを求めて、僕らは交わり続ける。」
B07	”　”	15 pt　2 位　4 sp しみじみ、一転、スプラッタ。究極の状況へと追いつめることで本質をあぶり出そう作戦でしょうか。 展開は、まあ定番なのだけれど、筆力で読者を悪夢へと叩き落としてくれます。おしあわせに、おにいちゃん☆ 愛があれば、最多特別賞も銀メダルも、要らないよね。 特別賞：賞ーック（最後の展開がショックでした。）　/　我孫子賞（我孫子武丸のサツリクに至る病を思い出したから）　/　究極の愛で賞（恐すぎ）　/　あやまれ（とにかく、あやまれ） イチオシフレーズ：「〇〇〇〇も」「……おいしいね。お兄ちゃん。」
B08	空っぽの箱	4 pt　8 位　0 sp 自分のものだと思っていた三つの命。小さな喪失感と、小さな安堵。 何が起きたのか、語りすぎないドッグフード・ラストが、しあわせだといいねと、よけいに想像を誘ってくれます。
B09	機械の心	1 pt　11 位　0 sp ユミの死のシーンがとても鮮明で印象的。そこから始まる悲劇。 「好きだよ」のリフレインがせつないです。 イチオシフレーズ：「すすすすす」
		7 pt　4 位　2 sp

B10	涙が、あふれた。	いきなりアジアンタムですからね。タダモノではありません。花言葉は「上機嫌・繊細」だとか。 　プロポーズ１秒前。CMのワンシーンのような洗練された空間に、ゆるやかな動きを乗せて、しあわせの予感をフレッシュ便でお届けいただきました。 特別賞：素敵な未来賞（ドリカムっぽいから）/　純粋な愛で賞（さわやか――） イチオシフレーズ：「なあ。・・・・・――――。」×２ 　「――――」
B11	マイラバー	6 pt　5 位　4 sp 　ラバー。そう来たか。二股にキレ。ふむふむと読み返して納得。おみごとでした。 　作り込んだワザが評価されて最多特別賞受賞です、おめでとう!! 特別賞：だまされた賞 /　大切にしま賞（破れると大変ですよ、いろいろと…（汗））　/　伸びるで賞（ゴムも票も愛も伸びます。）　/　good idea賞（アイデアがすごくいいんじゃない。）
B12	ありがとう、泥棒さん	32 pt　1 位　0 sp 　メルヘンメルヘン♪　前半の子どもらしい無邪気さと、後半のちょっと哲学したおとな考察との対比も、〈ただきれいなだけ〉に終わらない深みをもたらして、あざやか、ブラボーAHBO。 　あんまり褒めると後期に響きそうなので、このへんで。 　08コラムランドは、この傑出した書き手さんを生み、育てたことを誇りにしてよいと思いますよ、うん。 イチオシフレーズ：「そうか彼らは銀行員だったのか」